

Journal of the International College
for Postgraduate Buddhist Studies
Vol. XXI, 2017

国際仏教学大学院大学研究紀要
第21号（平成29年）

智顛撰 『維摩經文疏』 訳注（五）

藤
井
教
公

智顓撰『維摩經文疏』訳注（五）

藤井教公

はじめに

筆者は智顓撰『維摩經文疏』の訳注を、順次、本誌『国際仏教学大学院大学研究紀要』第十七号（平成二十五年三月刊）と第十八号（同二十六年三月刊）、第十九号（同二十七年三月刊）、第二十号（同二十八年三月刊）に、それぞれ智顓撰『維摩經文疏』訳注（一）、同（二）、同（三）、同（四）として発表した。

本稿は、先に刊行した訳注（一）から（四）に続くものである。体裁は前稿を踏襲して、『新纂大日本統感經』第十八卷所収の『維摩經文疏』のテキスト原文を数行のまとまりごとに区切って示し、その部分の訓読を掲げ、次にその部分の訳注を付した。本稿は四五頁中段十行目から四七七頁下段二十三行目までを掲載する。この続きは順次発表していきたい。過誤の多いことを懼れるが、大方の批正を請う次第である。凡例は次の通りである。テキストの解題は智顓撰『維摩經文疏』訳注（一）を参照されたい。

凡例

- 一、テキスト原文には一、二点、レ点などの返り点が施されているが、読点や句点はない。今、返り点を省き、意味に従って句点を施した。
- 一、テキストの文中には頁と段の変わり目にカッコで『新纂大日本統藏経』卷十八の頁と段を示した。
- 一、字体はテキスト部分とその引用、書き下し文、『大正藏経』所収の經典論書の引用部分などは、原則として正字を用いた。それ以外は略字を用いた。
- 一、テキスト文中のゴチック字体部分は『維摩経』の经文部分である。
- 一、テキスト文中の(へ)内の部分は割り注部分を示す。
- 一、書き下し文中のヤマカッコは筆者による補いで、『略疏』との対照によるテキスト欄外注記に従って字を補ったものである。
- 一、守篤本純の『維摩詰経疏籤録』の場所の指示は、巻数と頁数を記し、頁数の次に表の場合は「オ」、裏の場合は「ウ」と記した。
- 一、註に記した典拠の引用文で、引用部分が判然としにくい場合には該当部分に傍線を付した。

【テキスト】『新纂大日本統藏経』卷十八、475b10-21(以下頁、段、行のみを記す)

毗耶離菴羅樹園

此明聞經之方所。卽是出說經之處。助成勸信也^①。今釋方所卽爲二意。一明通方所。卽是毗耶離城。二明別方

所。的據菴羅樹園。第一通方所明毗耶離城者。復爲三意。一約事解釋。二對法門。三約觀心。第一約事者。此土翻云廣博嚴淨。其國寬平名爲廣博。城邑華麗無諸穢惡故名嚴淨也。又前師翻爲好稻。此土出好粳糧勝於餘國。故言好稻之國也。又有言。此是好道之國也。此國有好道路。平正砥直。又言好〈呼號反〉道。其國人民好樂正道。自敦仁義。不須君主。但有五百長者。共行道法。率土民庶。莫不齊肅。故云好道之國也。

(1) 原テキストには「進」とあるが、テキスト欄外注記には「進疑當作信」とあり、また『略疏』にも「即是顯示說經之處。助成勸信也。」(『大正藏』卷三十八、570c)とある。意味上からも今、「信」に改める。

(2) 原テキストは「見」。テキスト欄外注記には「見疑誤當作即」とあり、また『略疏』にも「今爲二。一通方所即毘耶離。」(『大正藏』卷三十八、570c)とある。これらにより、また意味上からも「即」に改める。

【書き下し】

毗耶離菴羅樹園

此れ聞經の場所を明かす。即ち是れ^{あきらか}的に說經の處を出し、勸信を助成するなり。今、方を釋するに即ち二意と爲す。一には通の場所を明かす。即ち是れ毗耶離城なり。^①二には別の場所を明かす。的に菴羅樹園に據る。第一に通の場所は毗耶離城と明かすとは、復た三意と爲す。一には事に約して解釋す。二には法門に對す。三には觀心に約す。第一に事に約すとは、此の土は翻じて廣博嚴淨と云う。其の國、寬平なるを名づけて廣博と爲す。城邑華麗にして諸の穢惡無きが故に嚴淨と名づくるなり。又、前師翻じて好稻と爲す。此の土、好き粳糧を出すこと餘國に勝れり。故に好稻の國と言うなり。又、有るが言わく、^④此れは是れ好道の國なり。此の國に好き道路有り。平正にして砥(平らの意)直なり。又、好〈呼號の反〉^⑤道と言う。其の國の人民、正道を好樂す。自ら仁

義敦し。君主を須いず。但だ五百長者有りて、共に道法を行じ、率土^⑥の民庶齊肅^⑦ならざるなし。故に好道の國と云ふなり。

- (1) 毗耶離城 毗耶離は (Yasāli, Vesālī) の音写。ガンジス河北岸、現在のバトナの近く。ブツダ時代にあった都城の名。
- (2) 菴羅樹園 菴羅樹とはマンゴー樹 (amra) のことだが、菴羅樹園は後に出家した遊女アムバパーリー (Ambapālī, Ambapālī) 所有の園林を指す。
- (3) 前師 『略疏』では「麗故名嚴淨。有師翻爲好稻。出好梗糧勝於餘國故也。」(『大正藏』卷三十八、570c10-11) とあって、「有師」とする。未検。
- (4) 有るが言わく 未検。
- (5) 好(呼號の反)道 「呼」の声母と「號」の韻母を合わせて「好」の音を表わす。「好」は上声に読んで、立派な、素晴らし^⑧の意。「好道」で、立派な道。
- (6) 率土 すべてのの国土の意味。『詩經』「小雅・北山」に「溥天之下、莫非王土。率土之濱、莫非王臣。大夫不均、我從事獨賢。」とあるによる。「濱」とは、土地と水との際をいい、「率土之濱」で大地の果て、転じてそこにいる者すべての意。
- (7) 齊肅 とこのついで、引き締まっている、の意。康僧會訳『六度集經』に「靖心齊肅退食絶獻」(『大正藏』卷三、2a16)、玄奘訳『大般若經』に「世尊行步威容齊肅如師子王。」(『大正藏』卷六、968a17) などの使用例がある。

第二對法門解釋者。隨取前所翻。即對法門。所言廣博嚴淨者。即是釋迦法身所居本土常寂光國。其性廣博。猶若虛空^①。功德智慧。無諸穢惡。故云嚴淨。迹居人間。亦託廣博嚴淨之土。是知非本無以垂迹。垂迹故居人間嚴淨之國。非迹無以顯本。寄毗耶離。說諸佛國土永寂。如虛空。即顯毘盧遮那常寂之本國也。

所言好稻之國者。即是釋迦本地所住大涅槃。百句解脫之理也。故法華經云。百穀苗稼。普皆增長。因其增長。穀實得成。即是百句解脫之妙果。爲好稻也。由本垂迹。由迹顯本類前可解。次云。譬如隘路不容二人竝行。解脫不爾。多所容受。多所容受。即真解脫。今釋迦居不思議解脫之大道。即是法界。多所容受。故名好道。由本垂迹。由迹顯本。類前可知也。所言好〔呼號〕道之國。思議之道。作意而修。不名好道。不思議道自行。即真修。任運理顯。化佗如慈石吸鐵。無緣無念自佗行化。此是性好之道也。由本垂迹。垂迹故名好道。因迹顯本。故居人間好道之國。說心淨佛土淨也。

第三約觀心明毗耶離者。一心三觀能觀心性。即知心性廣博。猶如虛空。即具福慧二種莊嚴。無染無著畢竟清淨。是則心淨佛土淨。故約觀心明廣博嚴淨之國也。

次觀明好稻之國者。若觀心性即是百句解脫之根本。名為好稻。如前引法華經。譬百穀苗稼。雨之所潤無不豐足也。約觀好道路之國者。若觀因緣中道則是行大直道。無留難故也。無有衆魔群盜之所得入。此道最勝故名好道。約觀明好〔呼號〕道者。若觀偏真之道。盡苦涅槃則於一切道法無好樂心。今觀圓真之「[yōga]」道。則好樂一切道法。無厭足盡未來際。故名好道也。

(1) テキスト原文の字は「處」であるが、「虚」の誤りであろう。今、改める。『略疏』には「本居寂」其性廣博猶若虚空」(『大正藏』卷三十八、570c16)とある。

(2) テキストに「由迹」の二字なし。しかし、欄外注記に「迹下疑脫由迹二字」とあり、この後の文にも「由迹顯本類前

可解」とあつて同様の文が見えるので、今、「由迹」を補う。また、『略疏』には「垂迹顯本類前可解」(『大正藏』卷三十八、570c23)とあつて「由迹」の語はない。

(3) テキスト欄外注記に「次下疑有脱文」とある。

(4) テキスト欄外注記に「疑下疑脱道字」とあり、『略疏』にも「不思議道自行眞修任運理顯化他」(『大正藏』卷三十八、570c29)とある。意味上からもいま、「道」の一字を補う。

(5) テキスト欄外注記に「次字下疑脱約字」とあるが、意味上、不可欠の字ではないので今は採らない。

【書き下し】

第二に法門に對して解釋するとは、前に翻ずる所を隨取せば、即ち法門に對す。言う所の廣博嚴淨とは、即ち是れ釋迦法身の所居、本土、常寂光國なり。其の性廣博にして、猶し虚空の若し。功德智慧あり、諸の穢惡無し。故に嚴淨と云う。迹を人間に居し、亦た廣博嚴淨の土に託す。是に知んぬ。本に非ざれば以て迹を垂れること無し。迹を垂れるが故に人間嚴淨の國に居す。迹に非ざれば以て本を顯わすこと無し。毗耶離に寄り、諸佛國土は永寂にして虚空の如しと説く。即ち毘盧遮那常寂の本國を顯わすなり。

言う所の好稻の國とは、即ち是れ釋迦本地所住の大涅槃、百句解脫の理なり。故に『法華經』に云く、「百穀苗稼、普く皆、增長す」と。⁽⁴⁾其れ增長するに因り、穀の實、成ずることを得。即ち是れ百句解脫の妙果を好稻と爲すなり。本に由りて迹を垂る。迹に由りて本を顯わすこと、前に類して解すべし。次に云く。譬へば隘路は二人並びて行くを容れざるが如し。解脫は爾らず。容受する所多し。容受する所多きは即ち眞解脫なり。今、釋迦不思議解脫の大道に居す。即ち是れ法界なり。含容する所多し。故に好道と名づく。本に由りて迹を垂る。迹に由りて本を顯わすこと、前に類して知るべきなり。

言う所の好（呼號）道の國、思議の道は作意して修す。好道と名づけず。不思議の道は自ら行ずれば、即ち真修なり。任運に理顯わる。化佗すること慈石が鐵を吸うが如し。緣無く、念無く、自佗の行もて化す。此れは是れ性好の道なり。本に由りて迹を垂る。迹を垂るるが故に好道と名づく。迹に因りて本を顯わす。故に人間好道の國に居し、心淨ければ佛土淨しと説くなり。

第三に觀心に約して毗耶離を明かすとは、一心三觀は能く心性を觀ず。即ち心性廣博なること猶お虚空の如きを知る。即ち福慧の二種の莊嚴を具す。染無く著無く、畢竟して清淨なり。是れ則ち心淨ければ佛土淨しなり。故に觀心に約して廣博嚴淨の國を明かすなり。

次に觀もて好稻の國を明かすとは、若し心性を觀ぜば、即ち是れ百句解脫の根本にして、名づけて好稻と爲す。前に『法華經』を引くが如し。百穀苗稼は雨の潤す所にして豐足ならざること無きを譬うるなり。觀に約する好道路の國とは、若し因緣中道を觀ぜば、則ち是れ大直道を行す。留難無きが故なり。衆魔群盜の入るを得る所有ること無し。此の道最勝なるが故に好道と名づく。觀に約して好（呼號）道を明かすとは、若し偏真の道、盡苦・涅槃を觀ぜば、則ち一切道法に於いて好樂心無し。今、圓真の「[Y]a[ra]」道を觀ぜば、則ち一切道法を好樂して、厭足無く未來際を盡くす。故に好道と名づくるなり。

(1) 人間 人間界のこと。

(2) 毘盧遮那常寂の本國 毗耶離城は「廣博嚴淨」と言われるが、その「廣博嚴淨」は釈迦の法身仏（すなわち毘盧遮那仏）である毘盧遮那仏の常寂光土そのものである、という意味。

(3) 百句解脫の理 大乘『涅槃經』卷五、四相品に「爾時迦葉菩薩復白佛言。世尊。唯願哀愍垂廣說大般涅槃行解脫義。佛讚迦葉。善哉善哉。善男子。」（『大正藏』卷十二、632a26-28）とあって、以下に解脫について百句近くの説明がある。

これを百句解脫といい、それら解脫の説明の中に通底する道理、理法を「百句解脫の理」という。

經には「善哉善哉。善男子。眞解脫者名曰遠離一切繫縛」(同前、632a28-29)より以下、「眞解脫者即是如來。如來者即是涅槃。涅槃者即是無盡。無盡者即是佛性。佛性者即是決定。決定者即是阿耨多羅三藐三菩提」(同前、636b12-15)に至るまで、解脫をあらゆる観点から説明している。

『法華玄義』には「大經云解脫之法多諸名字。百句解脫祇一解脫。」とある(『大正藏』卷三十三、783b22)。また、『法華玄義積義』に「大經中。言解脫亦爾。多諸名字者。大師在靈石寺一夏講百句解脫。每於一句作百句解釋。是則解脫有萬名字。」とある(同前、835b15-17)。

(4) 『法華經』に云く 葉草喻品の「百穀苗稼 甘蔗蒲萄…而各滋茂」(『大正藏』卷九、19c22-29)の取意。『六十華嚴』にも「百穀苗稼等 生長普滋茂」(同前、741c21)と、似たような表現がある。

(5) 真修 縁修の対。無意識的に自然任運になされる行。眞実の修行。

(6) 思議の道は作意して…任運に理顯わる。考えつくことができる修行道は、意識的にこれを行うものである。派な道とは言えない。それに対し、思いもよらない修行実践は無意識的に自然に実践される。それが眞実の修行であり、その実践によって眞理が自ずと顯わになる、の意。

(7) 人間好道の國 毗耶離城のことを指す。

(8) 心淨ければ佛土淨しと説くなり 『維摩經』仏国品に「隨其心淨則佛土淨」(『大正藏』卷十四、538c5)とある。

(9) 福慧の二種 福德と智慧のこと。阿耨多羅三藐三菩提に至るための資糧となるもの。

(10) 前に『法華經』を引くが如し 前註(4)を参照。

(11) 眞道の道 完全でない、偏りのある眞理しか得られない修行。円教以外の修行道という。これに対し、完全円満な眞理に到達する修行を円眞の道という。

(12) 好樂心 望み、願う心。「好樂」は同義の字を二字重ねた熟語。「樂」は願う、欲する、の意。『廣韻』に「樂、好也」とあり、『集韻』に「樂、欲也」とある。

【トキスト】 476a2-b9

第二明別方所の據菴羅樹園者。上明大城是通方所。助爲證信。猶恐混漫。今的舉所住則助成勸信義切也。此亦爲三意。一約事翻釋。二對法門。三約觀心。

第一約事翻釋者。肇師注云。菴羅是菓樹之名。以菓目樹。故云菴羅樹也。其菓似桃而非桃也。故言柰樹。定非柰樹矣。在他經^①。又翻云難分別樹。其菓似桃非桃。似柰非柰。故云難分別也。此與大涅槃經明意欲同。經云。如菴羅菓生熟難分。具有四句。此亦難分別也。又師解云。此樹開華。華生一女。國人歎異。以園封之。園既屬女。女人守護。故言菴羅園。此女宿善冥熏。見佛歡喜。以園奉佛。佛即受之。而爲住所。

第二對法門明義者。佛住三十七品總持之法。故言住菴羅樹園。所以然者。三十七品爲道品。道品爲樹。四念處爲種子。四正勤爲生長。四如意足爲牙生。五根如生根出莖。五力如抽枝葉。七覺爲華。八正爲果實。從七覺華起慈悲心。爲一切衆生。興大誓願。因願勤行得發總持。故說總持爲園也。大集經云。三十七品大神通。是名菩薩寶^③炬陀羅尼^④。陀羅尼者此翻爲總持。園持樹果。不致侵犯。故表總持也。今言華中生女者。即是因七覺華。生大慈悲之女也。女用園奉佛者。表因中總持一切善根迴向佛果。佛受園而住者。即是由成內因。果佛住於果。是爲如佛所得。佛於中住。住於無漏法林樹總持之園苑也。由本垂迹故。居人間菴羅樹園。用迹顯本。佛住菴羅園。說不思議無礙陀羅尼無漏法林樹總持之園苑也。菴羅樹菓。似桃非桃。似柰非柰。是則非桃非柰。而似桃似柰。名難分別樹者。如來住菴羅園。則表中道三十七品。中道似有非有。似無非無。是則非有非無。雖非有無而似有無。此理難分別。如來住此難分別之理。成三十七品佛菩提果。如此妙果所依之土。七種方便一切下地之所莫測。即表以難分別

樹園也。

(1) 原テキストでは「地」とある。テキスト欄外注記に「地疑誤當作他」とある。今、意味上より「地」を「他」に改める。

(2) 原テキストでは「緣」。意味上から、またテキスト欄外注記に「緣疑誤當作願」とあり、また『略疏』には「誓願。因願勤行得發總持」(『大正藏』卷三十八、571a28)とあることより、今、「緣」を「願」に改める。

(3) テキスト欄外注記に「炬上疑脫寶字」とあり、『略疏』には「大集云三十七品是名菩薩寶炬陀羅尼」(『大正藏』卷三十八、571a27)とある。今、「寶」の字を補う。

(4) テキスト欄外注記に「尼下疑脫陀羅尼三字」とあり、『略疏』にも「陀羅尼者此翻爲總持。」とある。今、意味上からも「陀羅尼」の三字を補う。

【書き下し】

第二に別の方所^{あまつか}は的に菴羅樹園に據るを明かすとは、上に大城を明かすは是れ通の方所にして、爲に證信を助く。猶お恐らくは混漫^①せり。今、的に所住を擧ぐるは、則ち勸信を助成する義、切なり。此れ亦た三意と爲す。一に事に約して翻釋す。二に法門に對す。三に觀心に約す。

第一に事に約して翻釋すとは、聲師の注に云く、「菴羅^②は是れ菓樹の名なり。菓を以て樹と目く。故に菴羅樹と云うなり。其の菓、桃に似て、しかも桃に非ざるなり。故に柰樹^④と言う。定んで柰樹に非ざるなり。他の經に在り^⑤と。又、翻じて分別し難き樹と云う。其の菓は桃に似て桃に非ず。柰に似て柰に非ず。故に分別し難きと云うなり。此れと『大涅槃經』の明かすと、意同じからんと欲す。經に云く^⑥。「菴羅菓は生熟分け難きが如し」

と。具さに四句有り。此れ亦た分別し難きなり。又、師解して云く。^⑦「此の樹、華を開くに、華、一女を生ず。國人は異を歎じ、園を以てこれを封ず。園、既に女に屬す。女人守護す。故に菴羅園と言う。此の女、宿善冥に熏じて、佛を見て歡喜し、園を以て佛に奉る。佛即ちこれを受けて住所と爲したもう」と。

第二に法門に對して義を明かすとは、佛は三十七品總持法に住するが故に、菴羅樹園に住すと言う。然る所以は、三十七品を道品^⑨と爲す。道品を樹と爲す。四念處^⑩を種子と爲す。四正勤^⑪を生長と爲す。四如意足^⑫を牙生と爲す。五根^⑬は根を生じ、莖を出すが如し。五力は枝葉の抽^ぬが如し。七覺^⑮を華と爲す。八正を果實と爲す。七覺の華より慈悲心^⑯を起す。一切衆生の爲に大誓願を興す。因願^⑰もて勤行して總持を發することを得。故に總持を園と爲すと説くなり。『大集經』に云く、^⑱「三十七品の大神通、是れを菩薩の寶炬陀羅尼と名づく」と。陀羅尼とは、此に翻じて總持と爲す。園は樹果を持ち、侵犯を致さず。故に總持を表するなり。今、華中に女を生ずと言うは、即ち是れ七覺の華に因りて、大慈悲の女を生ずるなり。女、園を用つて佛に奉るとは、因中の總持、一切の善根を佛果に迴向するを表す。佛、園を受けて住すとは、即ち是れ内因の成ずるに由りて、果の佛は果に住す。是れを佛の所得の如く、佛、中に住し、無漏法の林樹、總持の園苑に住すと爲すなり。本に由りて迹を垂るるが故に、人間の菴羅樹園に居す。迹を用つて本を顯わし、佛、菴羅園に住して、不思議無礙陀羅尼、無漏法の林樹^⑲、總持の園苑を説くなり。菴羅樹葉は桃に似て桃に非ず。奈に似て奈に非ず。是れ則ち桃に非ず。奈に似て奈に非ず。しかも桃に似て奈に似る。難分別の樹と名づくとは、如來が菴羅園に住するは、則ち中道三十七品を表す。中道は有に似て有に非ず。無に似て無に非ず。是れ則ち有に非ず、無に非ず。有無に非ずと雖もしかも有無に似る。此の理、分別し難し。如來は此の難分別の理に住し、三十七品佛菩提の果を成ず。此くの如き妙果所依の土は、七種方便^⑳一切下地の測るなきの所、即ち難分別の樹園を以て表するなり。

- (1) 混漫 「混」は入り交じる、「漫」は乱れている様、「混漫」で、入り乱れて区別がつかない様子をいう。『抱朴子』外篇「君道」に「或仁而不斷、朱紫混漫、正者不賞、邪者不罰」とある。
- (2) 肇師の注に云く……他の經に在り 僧肇の『注維摩』に「菴羅樹園 什曰。菴羅樹其果似桃而非桃也。肇曰。菴羅果樹名也。其果似桃而非桃。先言奈氏事在他經」(『大正藏』卷三十八、326b13)とある。
- (3) 菴羅 菴羅は amra の音写。マンゴーのこと。テキスト 475b10-21 の書き下し部分の註(一)を参照。
- (4) 奈樹 「奈」は、からなし、リンゴの類。
- (5) 他の經に在り 安世高訳「佛說奈女耆婆經」に、日本の『竹取物語』に似た、以下のような記述がある。

「佛在世時。維耶離國王苑中。自然生一奈樹。枝葉繁茂。實又加大。既有光色。香美非凡。王實愛此奈。自非宮中尊貴美人。不得瞰此奈果。其國中有梵志居士。財富無數。一國無雙。又聰明博達。才智超群。王重愛之。用爲大臣。王請梵志。飯食畢。以一奈賞與之。梵志見奈香美非凡。乃問王曰。此奈樹下。寧有小栽可得乞不。王曰。大多小栽。吾恐妨其大樹。輒除去之。卿若欲得。今當相與。即以一奈栽與。梵志得歸種之。朝夕灌溉。日日長大。枝條茂好。三年生實。光彩大小。如王家奈。梵志大喜自念。我家資財無數。不減於王。唯無此奈。以爲不如。今已得之。爲無減王。即取食之。而大苦澁。了不可食。梵志更大愁惱。乃退思惟。當是土無肥潤故耳。乃提取百牛之乳。以飲一牛。復取一牛乳。煎爲醍醐。以灌奈根。日日灌之。到至明年。實乃甘美。如王家奈。而樹邊忽復生一瘤節。大如手拳。日日增長。梵志心念。忽有此瘤節恐妨其實。適欲斫去。復恐傷樹。連日思惟。遲迴未決而節中。忽生一枝。正指上向。洪直調好。高出樹頭。去地七丈。其杪乃分作諸枝。周圍傍出。形如偃蓋。華葉茂好勝於本樹。梵志怪之。不知枝上當何所有。乃作棧閣。登而視之。見枝上偃蓋之中。乃有池水。既清且香。又如衆華。彩色鮮明。披視華下。有一女兒。在池水中。梵志抱取。歸長養之。名曰奈女。至年十五。顏色端正。天下無雙。宣聞遠國。有七國王。同時俱來。詣梵志所。求娉奈女以爲夫人。梵志大恐怖。不知當以與誰。乃於園中。架一高樓。以奈女著上。出謂諸王曰。此女非我所生。自出於奈樹之上。亦不知是天

龍鬼神女耶。鬼魅之物。今七王俱來求之。我設與一王。六王當怒。不敢愛惜也。女今在園中樓上。諸王便自共議。(後略)」(『大正藏』卷十四、902b6-c12)

(6) 經に云く 南本『涅槃經』四依品に「迦葉菩薩白佛言。佛僧之中有四種人。如菴羅菓生熟難知。破戒持戒云何可識」(『大正藏』卷十二、641b21-22) とある。

(7) 師解して云く『略疏』では「有師云此樹開華。華生一女。國人歎異以園封之。園既屬女。女人守護故云菴羅樹園。宿善冥薰。見佛歡喜。以園奉佛。佛即受之。而爲住所」(『大正藏』卷三十八、571a8-21)とあり、「有師」の説とするが「師」については不明。

(8) 三十七品總持法 三十七品は、三十七道品のこと。三十七種の悟りへ至るための修行方法をいう。七つのグループから成り、以下の文でその内容が順次紹介されている。總持法は陀羅尼のこと。兩者合わせて三十七品總持法という。

(9) 道品 悟りへ至る修行手段。三十七道品のこと。

(10) 四念處 心を静め、自身の「身」「受」「心」「法」の四種を対象として觀想し、誤った觀念を破して、觀慧を鋭いものにして悟りに向かう修行法。三十七道品の内容の第一に配当されている。

(11) 四正勤 悟りに至るための四種の正しい努力。すでに生じた悪を断じ、未発の悪を生じさせず、すでに生じた善を増長させ、未発の善を生ぜしめる努力をいう。三十七道品の内容の第二。

(12) 四如意足 神通自在を得る禪定を、その獲得手段と過程の上から四種に分けたもの。欲如意足、精進如意足、心如意足、思惟如意足の四種。三十七道品の内容の第三に相当する。

(13) 五根 悟りに至るための五種の機根。信根、精進根、念根、定根、慧根をいう。三十七道品の内容の第四。

(14) 五力 五障を退治し、悟りに至るための五種の力。信力、精進力、念力、定力、慧力をいう。三十七道品の内容の第五。

(15) 七覺 七覺支のこと。智慧によって諸法を観察する際の七種の心のあり方をいう。摂法覺支、精進覺支、喜覺支、輕安覺支、捨覺支、定覺支、念覺支の七種。三十七道品の内容の第六。

(16) 八正 八正道の略。正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の八種の修行をいう。三十七道品の内容の第七。

(17) 因願 如来が悟る以前の因位において立てた誓願のこと。

(18) 『大集經』に云く、『大集經』「陀羅尼自在王菩薩品」に「佛言。善男子。有陀羅尼名曰寶炬。菩薩住是陀羅尼中。能持一切諸佛名號。爲諸衆生分別解說。(中略) 其心能作大光明。是名寶炬陀羅尼(中略) 能說無常苦無我。諸法悉從緣得果。了了觀察諸法界。是名寶炬陀羅尼」(『大正藏』卷十三、25c+26a19) などとある。しかし、引用文の「三十七品大神通。是名菩薩寶炬陀羅尼」は未検。

(19) 無漏法の林樹 煩惱の穢れない(無漏) 仏の特性を林樹に喩えた表現。

(20) 七種方便 七方便のこと。修道の階位で、三賢・四善根をいう。見道に入るために修行力を加える段階で、ここまでが凡夫位。見道からは聖者位となる。

【テキスト】 476b9-476c6

第三約觀心者。若三觀觀心性不動。而修三十七品。因七覺起慈悲誓願。善根牢固。成諸總持。即是住菴羅樹也。故華嚴經說。菩薩有十種園。此即是三十七品園也。^①若約觀心解難分別者。如大涅槃經說。菴羅菓生熟難知。具有四句。一内外俱生。二外熟内生。三内熟外生。四内外俱熟。今行人修於三觀。觀不思議中道難分別之理。即有四種。一自有行人。觀心都未有。所以威儀麤獷。如菴羅菓内外俱生。二自有行人。修三觀。時外雖威儀齊整。身口似如柔和。内觀之心不證。定慧都無。所以如菴羅菓外熟内生。三自有行人。威儀不足可見。身口不無麤獷之相。

而內心觀行能熟入諸法門。定慧開發如菴羅菓外生內熟。四自有行人。修心三觀。威儀齊肅。身口柔和。似得道相。而內心三觀入諸法門。定慧開發或成觀行。入五品弟子位。或成相似〔476c〕。即。得六根清淨。如菴羅菓內外俱熟。是故佛法行人難可分別如菴羅菓也。

問曰。那忽處處對法門約觀心。作如是等說。佛意何必如是也。

答。佛心如大海。衆流皆入佛心。如如意珠隨人心念。即皆雨寶。佛心如淨鏡^②。隨外有像對即是現種種色。佛心如大地。隨有種子即生長菓牙。

(1) 原テキストは「修」。テキスト欄外注記に「修略疏作也字」とあり、また意味上からも「也」に改める。

(2) 原テキストは「佛心淨鏡」であるが、テキスト欄外注記に「淨上疑脫如字」とあり、『略疏』では「亦如淨鏡隨對象生。」〔大正藏〕卷三十八、571D22とある。意味上からも今、「如」の字を加えた。

【書き下し】

第三に觀心に約すとは、若し三觀^①もて心性を觀ずれば動ぜずして三十七品を修す。七覺に因りて慈悲の誓願を起こす。善根牢固にして、諸の總持を成す。即ち是れ菴羅樹に住するなり。故に『華嚴經』に説く^②。「菩薩に十種の園有り」と。此れ即ち是れ三十七品の園なり。若し觀心に約して難分別を解さば、『大涅槃經』の説くが如し^③。菴羅菓の生熟は知り難し。具さに四句有り。一には内外俱に生。二には外熟して内生。三には内熟して外生。四には内外俱に熟す。今、行人三觀を修して、不思議中道、難分別の理を觀ずるに即ち四種有り。一には自ずから行人有り、觀心都て未だ有らず。所以に威儀麤獷なり^④。菴羅菓の内外俱に生なるが如し。二に自ずから行人有り。三觀を修して時に外は威儀齊整^⑤にして、身口は柔和なるの如きに似ると雖も、内觀の心は證せず。定慧都て

無し。所以に菴羅菓の外は熟して内は生なるが如し。三には自ずから行人有り。威儀は見るべきに足らず。身口に麤獷の相無きにあらず。而して内心の觀行は能く熟して諸の法門に入る。定慧開發して、菴羅菓の外は生、内は熟するが如し。四には自ずから行人有り。心に三觀を修して威儀齊肅に、身口柔和にして、得道の相に似る。しかも内心に三觀もて諸の法門に入る。定慧開發して或は觀行を成じ、五品の弟子の位^⑥に入る。或は相似[476c] 即^⑦を成じて六根清淨を得。菴羅菓の内外俱に熟するが如し。是の故に佛法の行人は分別すべきこと難きは菴羅菓の如きなり。

問うて曰く。なんぞ忽ち處處に法門に對し、觀心に約して是くの如き等の説を作すや。佛意何ぞ必ず是くの如くならんや。

答う。佛心は大海の如し。衆流皆入る。如意珠の如し。人の心念に隨つて即ち皆、寶を雨ふらす。佛心は淨鏡の如し。外の像有りて對するに隨つて、即ち是れ種種の色を現す。佛心は大地の如く、種子有るに隨つて、即ち菓牙を生長す。

(1) 三觀 天台でいう從仮入空觀、從空入仮觀、中道第一義觀の三種の觀法。これを一心に行うのを一心三觀という。

(2) 『華嚴經』に説く『六十華嚴』離世間品に以下のようにある。

「佛子。菩薩摩訶薩。有十種園林。何等爲十。所謂生死園林。行菩薩行不起憂惱故。教化衆生園林。不厭衆生故。一切劫園林。攝取菩薩一切大行故。清淨世界園林。性無著故。一切魔宮殿園林。降魔境界故。聽受正法園林。正念觀察故。六波羅蜜四攝法三十七道品園林。修習慈父境界故。十力四無所畏。乃至一切佛法園林。不念異法故。菩薩示現一切無量無邊功德神力園林。轉淨法輪調伏衆生故。於念念中爲一切衆生。現成正覺園林。法身如虛空充滿一切世界平等覺故。佛子。是爲菩薩摩訶薩「十種園林」(『大正藏』卷九、640a22-b4)

(3) 『大涅槃經』に説くが如し。南本『涅槃經』四依品に、「迦葉菩薩白佛言。佛僧之中有四種人。如菴羅菓生熟難知。破戒持戒云何可識」(『大正藏』卷十一、641b21-22)とある。

(4) 麤獷 同義の二字を重ねた熟語。「麤」は粗野、の意。「獷」は荒々しい、粗悪の意。仏典に多くの使用例がある。たとえば、佛陀耶舍・竺佛念訳『長阿含經』卷十三に「所言麤獷。喜惱他人。令生忿結。捨如是言」(『大正藏』卷一、83c22-23)とある。

(5) 威儀齊整 立居振舞が整っていて、きちんとしていること。「齊整」は同義の二字を重ねた熟語。『後漢書』「獨行列傳」に「汝脩身謹行、學聖人之法、將以齊整風俗、奈何不能正其家乎」とある。

(6) 五品の弟子の位 天台の円教の行位で、六即の位では觀行即到たる。別教では十信以前、三藏教では三賢四善根の凡夫位に相当する。

(7) 相似即 天台の行位で、六即の内の下から四番目の行位。円教の初信から十信の位をいう。別教では初住から十回向までに相当する。

【テキスト】 476b9-c24

大涅槃經明摸象之譬。得失之相不能知⁽¹⁾。但博地凡夫各隨心解。稱歎佛德。何能普會。執見之徒自謂一切如己所解。諍論是非。何必合於佛意。若言經中無對法門解釋義者。此經佛道品。普現色身菩薩。問維摩詰言。居士父母妻子親戚眷屬等。悉爲是誰。大士答言。智度菩薩母。方便以爲父。一切衆導師。無不由此生。法喜以爲妻。慈悲心爲女。善心誠實男。畢竟空寂舍。淨名既是在家菩薩。何容無有父母妻子家宅而不依事。答。悉約內行法門答者。當知諸佛菩薩不起道法。現凡夫事。雖現凡夫事。皆內表道法也。如佛般涅槃處在雙樹。四枯四榮。豈可直作樹木之解。且如來誠說皆表半滿枯榮。今在毗耶菴羅樹園。欲說不思議解脫法門。不捨道法。現迹同凡住毗耶離。

豈不遠表極地所住法門也。華嚴經明十城十園。豈止是世間城園也。此經下文菩薩行品云。諸佛威儀有所進止。無非佛事。何得但作事解。都不尋思諸佛菩薩不思議教。善根祕密表發之事。

(1) テキスト欄外注記に「能下疑脫知字」とある。『略疏』では「大地隨種生長。大經摸象各不能知。亦如浮鏡隨對像生。」(『大正藏』卷三十八、571b23)とあるので、今、「知」の字を補った。

(2) テキスト欄外注記に「而下疑脫不字」とある。『略疏』では「何容無有父母家屬。而不依事」(『大正藏』卷三十八、571b28)とあり、また意味上からも今、「不」の字を補った。

【書き下し】

『大涅槃經』に摸象の譬を明かす^①。得失の相、各知ること能わず。但だ博地の凡夫、各、心に隨つて解し、佛徳を稱歎す。何ぞ能く普く會せん。見を執するの徒、自ら謂わく、「一切は己に解す所の如し。是非を諍論して、何ぞ必ず佛意に合せんせんや。」と。若し經中に法門に對して義を解釋すること無しと言わば、此の經の佛道品に普現色身菩薩が維摩に問い詰言す。「居士の父母妻子親戚眷屬等は悉く是れ誰と爲すや。」と。大士答えて言く。「智度を菩薩の母、方便を以て父と爲す。一切衆の導師は此れに由りて生ぜざること無し。法喜を以て妻と爲し、慈悲心を女、善心誠實を男、畢竟空寂を舍と爲す」と。淨名は既に是れ在家菩薩なり。何ぞ父母妻子家宅有ること無きを容れて事に依らざるや。

答う。悉く内行法門に約して答うれば、當に知るべし、諸佛菩薩は道法^④を起こさず、凡夫の事を現す。凡夫の事を現すと雖も、皆、内に道法を表すなり。佛般涅槃の處に雙樹の四枯四榮^⑤在るが如し。豈に直ちに樹木の解を作すべけんや。且く如來の誠説は皆、半滿枯榮を表す^⑥。今毗耶菴羅樹園に在るは不思議解脫法門を説かんと欲す。

道法を捨てず。迹を現じ凡に同じて毗耶離に住す。豈に遠く極地所住の法門を表わさざるや。『華嚴經』に十城十園を明かす。^⑦豈に是れ世間の城園に止まらんや。此の經の下の文、菩薩行品に云く、「諸佛の威儀に有所進止する所有り。佛事に非ざることを無し」と。何ぞ但だ事の解をのみ作して、すべて諸佛菩薩の不思議教、善根秘密表發の事を尋思せざるを得んや。

(1) 『大涅槃經』に摸象の譬を明かす 南本『涅槃經』師子吼菩薩品に次のようにある。「善男子。譬如有王告一大臣汝牽一象以示盲者。爾時大臣受王勅已。多集衆盲以象示之。時彼衆盲各以手觸。大臣即還而白王言。臣已示竟。爾時大王即喚衆盲各各問言。汝見象耶。衆盲各言。我已得見。王言。象爲何類。其觸牙者即言象形如茱萸根。其觸耳者言象如箕。其觸頭者言象如石。其觸鼻者言象如杵。其觸脚者言象如木臼。其觸脊者言象如床。其觸腹者言象如甕。其觸尾者言象如繩。善男子。如彼衆盲不說象體亦非不說。若是衆相悉非象者。離是之外更無別象。」『大正藏』卷十一、802a9-21)

(2) 博地の凡夫 凡夫を内凡・下品・薄地の三種に分ける内の最下位。「博地」は「薄地」に同じ。

(3) 此の經の佛道品に普現色身菩薩 『維摩經』 仏道品に、次のようにある。

「爾時會中有菩薩名普現色身。問維摩詰言。居士。父母妻子親戚眷屬吏民知識悉爲是誰。奴婢僮僕象馬車乘皆何所在。於是維摩詰以偈答曰。智度菩薩母。方便以爲父。一切衆導師。無不由是生。法喜以爲妻。慈悲心爲女。善心誠實男。畢竟空寂舍。」

『大正藏』卷十四、549b27-c5)

(4) 道法 悟りに至る教法、あるいは悟りそのもの。

(5) 雙樹の四枯四榮 「雙樹」は仏般涅槃の地、クシナガラにあった娑羅雙樹のこと。「四枯四榮」は、仏の入涅槃の時、東西南北にそれぞれ沙羅雙樹があつて、それぞれの双樹が一本は枯れ、一本は勢いが盛んだつたので、四枯、四榮という。智顛撰『維摩經文疏』詁注(三)の註を参照(『国際仏教学大学院大学研究紀要』第19号、28頁、註(9)、201

5年3月)。

(6) 豈に直ちに樹木の解……を表す。どうして直ちに樹木に喩えられる教えの本質を説くことがあるか。如来の真実の説法も、教化の対象によって、説法に小乗教、大乘教の区別を設けるのだ、の意。

(7) 『華嚴經』に十城十園を明かす「十園」はテキスト47629-47630部分の訳注(2)を参照。「十城」は『籤録』には「十城未見其文」という(巻一、二十五ウ)。入法界品には「爾時善財童子。如是經遊百一十城。到普門城邊。思惟而住。」(『大正藏』卷九、78327-28)とあり、「百一十城」をいう。

(8) 此の經の下の文、菩薩行品 經に「諸佛威儀進止。諸所施爲無非佛事」(『大正藏』卷十四、53228)とある。

【テキスト】 467c24-477a17

又法華經云。欲說是經。應入如來室。若如來衣 [477a] 坐如來座。然後於四衆中。以無所畏心。廣說此法華經。若言不對法門明義。欲講說時。將不移佛像入佛大殿。上佛高座披佛像衣。處衆說法。此豈得佛意耶。法華經所明如來室者。乃是大慈悲心。如來衣者即是柔和忍辱。如來座者則一切法空是。豈得入佛殿坐佛高座著佛像衣耶。¹

問。法華經中佛自解說對三法門。其義可爾。今毗耶離菴羅樹園。佛不解釋。何得師心對法門也。

答曰。若謂佛不解釋。不得厝意。一切經文何嘗併是佛自解釋。若師心解豈非皆有失也。

問曰。華嚴大乘可得約行明諸法門。此方等經及小乘教何得亦約觀行明義。

答曰。此經既云。諸佛解脫當於衆生心中求。若不約觀行。豈稱斯文。若不毗耶離菴羅樹園對法門。則不得約觀心解釋。何得於衆生心中求諸佛解脫。若不於心中求解脫者。云何得住不思議解脫。若不住不思議解脫。云何於一毛孔見諸佛土變現自在。如不思議品所明也。

(1) テキスト欄外注に「坐下疑脫佛高座三字」とある。意味上からも、前文の「入佛大殿上佛高座披佛像衣」を参照するに、「佛高座」三字があつた方がよい。今、補う。

【書き下し】

又、『法華經』に云く、「⁽¹⁾是の經を説かんと欲さば應に如來の室に入り、如來の衣を著し、如來の座に坐すべし。然る後に四衆の中において無所畏の心を以て廣く此の『法華經』を説くべし。」と。若し法門に對して義を明かさずと言わば、講說せんと欲する時、將に佛像を移さず、佛の大殿に入り、佛の高座に上がり、佛の像の衣を披て衆に處して説法すべし。此れ豈に佛意を得んや。『法華經』所明の如來の室とは、乃ち是れ大慈悲心なり。如來の衣とは即ち是れ柔和忍辱なり。如來の座とは、則ち一切法空是れなり。⁽²⁾豈に佛殿に入り、佛の高座に坐し、佛の像の衣を著すことを得んや。

問う。『法華經』中、佛は自ら解説して三法門に對す。⁽³⁾其の義は爾るべし。今、毗耶離菴羅樹園に佛は解釋せず。何ぞ心を師として法門に對することを得んや。

答えて曰く、若し佛は解釋せず、意を厝く⁽⁴⁾ことを得ずと謂わば、一切經の文は何ぞ皆て併さるや。是れ佛の自解釋なり。若し心を師として解さば、豈に皆失有るに非ずや。

問いて曰く、華嚴大乘は行に約して諸の法門を明かすことを得べし。此の方等經及び小乘教は何ぞ亦た觀行に約して義を明かすことを得んや。

答えて曰く、此の經は既に「諸佛の解脫は當に衆生の心行中において求むべし」と云えり。⁽⁴⁾若し觀行に約さざれば、豈に斯の文と稱せんや。若し毗耶離菴羅樹園を以て法門に對せざれば、則ち觀心に約して解釋することを得ず。何ぞ衆生の心行中において諸佛の解脫を求むることを得んや。若し心行中に解脫を求めざれば、云何が不

思議解脫に住することを得んや。若し不思議解脫に住せざれば、云何が一毛孔において諸の佛土を見るに變現自在なること不思議品の明かす所の如きなるや。

(1) 『法華經』に云く、法師品に「善男子善女人。如來滅後。欲爲四衆說是法華經者。云何應說。是善男子善女人。入如來室。著如來衣。坐如來座。爾乃應爲四衆廣說斯經。如來室者。一切衆生中大慈悲心是。如來衣者。柔和忍辱心是。如來座者。一切法空是。安住是中。然後以不懈怠心。爲諸菩薩及四衆廣說是法華經。」(『大正藏』卷九、312c28)とある。

(2) 『法華經』所明の如來の室とは…一切法空是れなり『妙法華』法師品に「如來室者。如來衣者。柔和忍辱心是。如來座者。一切法空是。」(『大正藏』卷九、312c27) 前注(1)を參照。

(3) 三法門 法師品で説く、仏滅後に『法華經』を弘布する者の心構えとしての「衣座室の三軌」のこと。

(4) 此の經は『維摩經』文殊師利問疾品に「又問。諸佛解脫當於何求。答曰。當於一切衆生心中求」(『大正藏』卷十 四、544c-7)とある。

【テキスト】 477a17-b05

復云何得法華經明身根清淨一切十方國土皆於身中現。又豈得如華嚴經說。無量諸世界悉從心緣起。無量諸佛國皆於毛孔現也。如前問言。小乘不得約觀心解釋者。何故聲聞經中佛爲牧牛人説十一法。皆一一內合比丘觀心。如是等例。豈非方等及三藏經教對諸法門觀心明義也。

問曰。玄義明三觀四教。懸釋此經。三觀爲前。四教在後。入文帖釋。何得四教爲前。三觀在後。

答曰。玄義論其玄旨。教從觀出。如破微塵出三千大千經卷。入文帖釋。從事入理。故先須四教銷釋經文。尋文

入理。必須觀行。次略點三觀章門。一品一偈一句。無不皆入不二法門。住不思議解脫也。

維摩羅詰經文疏卷第二

(1) 欄外注記に「十下疑脫一字」とある。『略疏』では「若言小乘不得約觀心解者。何故聲聞經中佛爲牧牛人說十一法。一一內合比丘觀心」(『大正藏』卷三十八、571c24-26)とあるので、今「一」の字を付加した。

【書き下し】

復た、云何が『法華經』に(1)身根清淨にして一切十方國土、皆な身中に現わると明かすを得んや。又、豈に『華嚴經』に、(2)「無量の諸世界は悉く心より緣起し、無量諸佛國は皆な毛孔に現わる」と説くが如きを得んや。

前問に言うが如く、小乗は觀心に約して解釋することを得ざれば、何が故に聲聞經中に佛牧牛人の爲に十一法(3)を説き、皆な一一に内に比丘の觀心に合するや。是くの如きらの例、豈に方等及び三藏の經教は諸の法門に對して觀心もて義を明かすに非ざるや。

問うて曰く、『玄義』は三觀四教を明かし、懸かに此の經を釋す。(4)三觀を前と爲し、四教後に在り。文に入て帖釋するに、何ぞ四教を前と爲し、三觀後に在るを得んや。

答えて曰く、『玄義』は其の玄旨を論ず。教は觀より出づること、微塵を破して三千大千經卷を出す(6)が如し。文に入りて帖釋するに、事より理に入る。故に先に四教を須いて經文を銷釋す。(7)文を尋ねて理に入るに、必ず觀行を須う。次に略して三觀の章門を點するに、一品一偈一句、皆な不二法門に入り、不思議解脫に住せざること無きなり。

維摩羅詰經文疏卷第二

- (1) 云何が『法華經』に『妙法華』法師功德品に「復次常精進。若善男子善女人。受持是經。若讀若誦若解說若書寫。得八百身功德。得清淨身如淨琉璃。衆生意見。其身淨故。三千大千世界衆生。生時死時上下好醜。生善處惡處。悉於中現。及鐵圍山。大鐵圍山。彌樓山。摩訶彌樓山等諸山。及其中衆生悉於中現。下至阿鼻地獄上至有頂。所有及衆生悉於中現。若聲聞辟支佛菩薩諸佛說法。皆於身中現其色像」とある(『大正藏』卷九、49c23-50a01)。
- (2) 『華嚴經』に『六十華嚴』卷二十五に「無量諸境界 悉從心緣起 一切諸法界 皆入一毛道」(『大正藏』卷九、626a5-6)とある。
- (3) 十一法 比丘の成就すべき十一法。戒・定・慧・解脫・解脫見慧・根寂(六根の寂靜)・知足・修法・知方便・分別義・不著利をいう。
- (4) 『玄義』は三觀四教を明かし、『法華玄義』が空觀、仮觀、中道第一義觀の三觀と、藏通別円の四教を明かしていること。『玄義』は名体宗用教の五重玄義によって、『法華經』の全体を解釈しているが、教については四教が、觀法の実践については三觀が根底に据えられている。
- (5) 帖釋 文々句々に亘って解釈すること。「帖」は(紙を)貼り付けるの意。覚え書き用の紙を貼り付けるように隨文解釈してゆくこと。注釈用語で、『法華玄義』にも「二明 四悉檀帖釋者。機應各有三義。即四悉檀意也」(『大正藏』卷三十三、747a17-18)と使用例がある。
- (6) 微塵を破して…が如し 『法華玄義』卷二上に『華嚴經』を引いて「華嚴云。心佛及衆生是三無差別。破心微塵出大千經卷。是名心法妙也」(『大正藏』卷三十三、693a29-b1)と云う。

(7) 銷釋 注釈用語で、解釈する、の意。「銷」は消える、解かす、の意味で、「釋」と同義。『法華玄義』にも「但圓門融淨教尚虛玄。銷釋經論何競不息。」(『大正藏』卷三十三、792a15-16)と、この使用例がある。

【テキスト】 477b11-c1

維摩羅詰經文疏卷第三 (從與大比丘訖無礙解脫)

[477b12] 與大比丘衆八千人俱。

此下第六辨同聞衆。證阿難等所傳不謬也。若獨處自聞則難可信。今與諸聲聞大菩薩天龍八部四衆共聞。此豈謬傳也。就辨衆爲二。一大聲聞衆。二菩薩衆。⁽¹⁾三天龍四衆。

問曰。若從小爲初應先天龍等。若大爲初應先菩薩。

答曰。小乘出家得道。荷佛恩深。故常在佛側。給侍陪奉。具戒行自守。物所歸信證經義親。故須前辨。若菩薩外化無方。不恒佛側。和光利物難可測量。世人但觀其迹。莫知其本。證信義疎。次而辨也。天龍四衆結惑未盡。猶居凡地。內無得道之功。外闕化佗之利。於證經爲劣。故次後辨也。復次此有所表。二乘滯空。凡夫滯有。菩薩不滯空有。常行不二正道。故處其中間。是故涅槃 [477c] 云。凡夫者有。二乘者空。菩薩之法。不空不有也。

(1) テキスト欄外注記に「薩下疑脫衆三二字」とあり、『略疏』では「二菩薩衆。三維衆」(『大正藏』卷三十八、572a)とある。また意味上からも「衆三」の二字を加える。

【書を下し】

維摩羅詰經文疏卷第三 (與大比丘より無礙解脫に訖る)

與大比丘衆八千人俱。

此の下、第六に同聞衆を辨じて、阿難等の傳うる所謬らざるを證するなり。若し獨處に自ら聞かば則ち信ずべきこと難し。今、諸の聲聞、大菩薩、天龍八部、四衆と共に聞く。此れ豈に謬りて傳えんや。衆を辨ずるに就いて三と爲す。一には大聲聞衆、二には菩薩衆、三には天龍、四衆なり。

問うて曰く。若し小より初と爲さば、應に天龍等を先にすべし。若し大を初と爲さば、應に菩薩を先にすべし。答えて曰く。小乗は出家し得道す。佛恩を荷うこと深し。故に常に佛の側に在りて、給侍陪奉す。戒行を具して自守す。物の信に歸する所なり⁽¹⁾。經を證する義親し。故に須らく前に辨ずべし。菩薩の若きは外化無方にして、恒には佛の側ならず。和光利物は測量すべきこと難し。世人は但だ其の迹を觀るのみにして、其の本を知ることなし。信を證するの義疎し。次にして辨ずるなり。天龍・四衆は結惑未だ盡さず。猶お凡地に居す。内には得道の功無く、外には化佗の利を闕く。經を證するに於いて劣と爲す。故に次後に辨ずるなり。復た次に此れに表する所有り。二乗は空に滞り、凡夫は有に滞る。菩薩は空有に滞らず。常に不二の正道を行ず。故に其の中間に處す。是の故に『涅槃』に云く、⁽⁶⁾「凡夫は有、二乗は空、菩薩の法は不空不有なり」と。

- (1) 物の信に歸する所なり 人々が信を寄せる対象となる、の意。「物」は人々の意。
- (2) 經を證する義 經典に記されている通りに実践するという意味。經に忠実に修行するという意味。
- (3) 外化無方 限定された地域だけでなく、あらゆる方向の世間の人々を教化すること。
- (4) 和光利物 優れた能力を隠して世間に同じ、人々を教化すること。「和光」は、『老子』第四章及び第五十六章に出る

「和其光、同其塵」(その光を和らげ、その塵を同じくす)に由来する言葉。『老子』第四章に、「(道)・・・挫其銳。解其紛。和其光。同其塵」(其の鋭きを挫き、其の紛を解き、其の光を和らげ、其の塵に同じくす)とあり、第五十六章に「知者不言。言者不知。塞其兌。閉其門。挫其銳。解其紛。和其光。同其塵」(知者は言わず、言う者は知らず。其の兌を塞ぎ、其の門を閉じ、其の鋭きを挫き、其の紛を解き、其の光を和らげ、其の塵に同じくす)とある。

(5) 結惑 煩惱のこと。「結」も「惑」も煩惱を意味する。

(6) 『涅槃』に云く、『涅槃經』には直接この文に該当する經文は見当たらない。『籤録』は、「檢經未見全文。第二十四(二十三) 德王品云。爲衆生故。說有法性。爲諸賢聖說無法性。乃至菩薩實無所見。無所見者。雙非有無也。恐取此文意也」(卷一、二十六才)という。『籤録』の指示する『涅槃經』の文は次の通り。

「諸佛菩薩有二種說。一者有性。二者無性。爲衆生故說有法性。爲諸賢聖說無法性。爲不空者見法空故。修空三昧令得見空。無法性者亦修空故空。以是義故修空見空。善男子。言見空空是無法爲何見者。善男子。如是如是。菩薩摩訶薩實無所見。無所見者即無所有。無所有者即一切法。菩薩摩訶薩修涅槃。於一切法悉無所見。」(『大正藏』卷十二、765c-13)

【テキスト】 477c1-19

問曰。何意不歎聲聞德。答。諸師解言既被呵彈無德可稱。故不歎德也。今謂不爾。菩薩亦被呵彈。何故歎德。又金剛般若亦不歎德。非爲被呵彈也。今明。恐是出經者爲存其略耳。又解云。大之一字即是略歎德義也。如大智論云。若說小乘經但明比丘衆。若說摩訶衍非但辨比丘必須辨菩薩衆。如金剛般若但辨比丘衆。不列菩薩衆。豈可言金剛般若是小乘經也。但是出經者略不明菩薩衆耳。此經明比丘不歎德者。亦是略也。第一明大聲聞衆者。初明比丘即是通語其人類多種。如胡越不同。佛法出家之人。皆類名比丘。今釋此科文有五別。第一釋與。第二釋大。

第三釋比丘。第四釋衆。第五釋數量。第一釋與義者。此經云與。大品經云共與者。即是共義也。大智論辨七一。明共。所謂一處一時一戒一心一見一道一解脫。故名之爲共。即是與義也。若講法華經。必須約本迹明義。解釋同聞歎德。今經既未發本顯迹。但釋因緣事解觀行而已。言一處者同在毗耶離菴菴羅樹園也。

二明一時者一會說法之時也。三明一戒者同得律儀無作戒也。四明一心者俱得九次第定心也。五明一見者俱見四真諦也。六明一道者悉得無學道也。七明一解脫者俱證有餘解脫也。

(1) 欄外注記に「類下疑脫人類二字」とあるが、今は採らない。『略疏』では、「一明聲聞衆者。初明比丘。即是通語人類多種。如胡越不同」(『大正藏』卷三十八、572a)とある。

【書さ下し】

問うて曰く、何の意か聲聞の徳を歎ぜざるや。答う。諸師の解言は既に呵彈を被り、徳として稱すべき無し。故に徳を歎ぜざるなり。今謂く、「爾らず」と。菩薩も亦た呵彈を被る。何が故に徳を歎ざるや。又、『金剛般若』、亦た徳を歎ぜず^②。爲に呵彈を被るに非ざるなり。今明さく、恐くは是れ出經者は其の略を存するが爲なるのみ。又解して云く、大の一字は即ち是れ略して徳を歎ずる義なり。『大智論』に云うが如し^③。「若し小乘經を説かば、但だ比丘衆のみを明かす。若し摩訶衍を説かば、但だ比丘を辨ずるのみに非ず、必ず須らく菩薩衆を辨ずべし」と。『金剛般若』の如きは但だ比丘衆のみを辨じて菩薩衆を列せず。豈に『金剛般若』は是れ小乘經なりと言うべけんや。但だ是れ出經者は略して菩薩衆を明さざるのみ。此の經は比丘を明かして徳を歎ぜざるとは、亦た是れ略なり。第一に大聲聞衆を明かすとは、初めに比丘を明かすは即ち是れ通じて其の人類の多種なるを語る。胡越の不同なるが如し。佛出家の人は皆な類して比丘と名づく。今、此の科文を釋すに五別有り。第一に

「與」を釋す。第二に「大」を釋す。第三に「比丘」を釋す。第四に「衆」を釋す。第五に「數量」を釋す。第一に「與」の義を釋すとは、此の經は「與」と云う。大品經に「共與」と云うは、即ち是れ共(4)の義なり。『大智論』は七の一を辨じ、「共」を明かす。所謂、一處・一時・一戒・一心・一見・一道・一解脫なり。故にこれを名づけて共と爲す。即ち是れ「與」の義なり。若し『法華經』を講ざば必ず須らく本迹に約して義を明かし、同聞歎徳を解釋すべし。今經は既に未だ本を發し迹を顯わさず、但だ因縁事解の觀行を釋するのみ。一處と言(5)うは、同じく毗耶菴菴羅樹園に在るなり。

二に一時を明かすとは、一會の説法の時なり。三に一戒を明かすとは、同じく律儀無作戒(6)を得るなり。四に一心を明かすとは、俱に九次第定心(7)を得るなり。五に一見を明かすとは、俱に四真諦(8)を見るなり。六に一道を明かすとは、悉く無學道(9)を得るなり。七に一解脫を明かすとは、俱に有餘解脫を證するなり。

(1) 諸師の解言は既に呵彈を被り 仏の十大弟子らが過去に維摩詰に法門上で手ひどく論破されていることをいう。

(2) 『金剛般若』、亦た徳を歎ぜず 『金剛般若經』は『維摩經』と同じ説處であるが、經の冒頭の會座の同聞衆に関する歎徳は記されていない。經には「如是我聞。一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園。與大比丘衆千二百五十人俱。爾時世尊食時著衣持鉢入。舍衛大城乞食。於其城中次第乞已。還至本處飯食訖。收衣鉢洗足已敷座而坐。時長老須菩提在大衆中。即從座起偏袒右肩右膝著地。合掌恭敬而白佛言。希有世尊。如來善護念諸菩薩。善付囑諸菩薩。世尊。善男子善女人。發阿耨多羅三藐三菩提心。應云何住云何降伏其心。」とある(『大正藏』卷八、748c21-29)。

(3) 『大智論』に云うが如し 直接引文と合致する文は見当たらないが、『大智度論』卷四に「問曰。何以故。大乘經初。菩薩衆聲聞衆兩説。聲聞經初獨説比丘衆。不説菩薩衆。答曰。欲辯二乘義故。佛乘及聲聞乘。聲聞乘陝小。佛乘廣大。聲聞乘自利自爲。佛乘益一切」(『大正藏』卷二十五、85b16-18)とあるのに相當するか。

- (4) 大品經に「共與」と云うは『大品般若經』の序品冒頭には「如是我聞。一時佛住王舍城耆闍崛山中。共摩訶比丘僧大數五千人。皆是阿羅漢諸漏已盡無復煩惱心得好解脫慧得好解脫。其心調柔軟摩訶那伽。所作已辦。」(『大正藏』卷八、217a7-10)とあって、「共」のみで「共與」とはいわない。
- (5) 『大智論』は七の一を……を明かす『大智度論』卷三に「經共摩訶比丘僧。論共名一處一時一心一戒一見一道一解脫。是名爲共。」(『大正藏』卷二十五、79b24-25)とある。
- (6) 律儀無作戒 戒を遵守することが習慣的となり(律儀)、任運に作為なくして実践される戒のこと。
- (7) 九次第定心 禪定心で、四禪、四無色定と滅尽定の九種をいう。
- (8) 四真諦 四諦のこと。『略疏』では「一見者俱見四諦」(『大正藏』卷三十八、572b4)とある。
- (9) 無學道 修行を完成した阿羅漢の境地のこと。

Summary

An annotated Japanese-translation of Zhiyi's *Weimojing wenshu* 『維摩經文疏』 (5)

FUJII Kyoko

The *Weimojing wenshu* 『維摩經文疏』 is a Zhiyi's commentary on the text of Kumārajīva's translation of the *Vimalakīrti-nirdeśa-sūtra* (*Weimojie suoshuo jing* 維摩詰所說經).

Zhiyi 智顛 (538-597) composed the commentary with twenty-five fascicles in his latest years at the request of Prince Guang of Jin. After Zhiyi died, his disciple Guanding 灌頂 (561-632), the fourth patriarch of the Tiantai school, made up the commentary to twenty-eight fascicles. This Zhiyi's commentary seemed to have been one of the most important works to research his latest doctrinal thought by the reason that the work had been dictated by himself. In spite of that, the commentary had not been studied so often because of its great amount. Since Zhanran 湛然 (711-782) had distilled the Zhiyi's *Weimojing wenshu*, and made the *Weimo jing lue shou* 『維摩經略疏』 with 10 fascicles, his concise commentary was generally available for study on the *Weimojie suoshuo jing* in Tiantai school. In the above circumstances, at the present, although Zhanran's concise commentary is put in *Taishō shinshū daizōkyō* 『大正新脩大藏經』, Zhiyi's is not in spite of its value.

Recently some new studies on Zhiyi's commentary have been made in overall aspects, that is, from philological study to doctrinal thoughts one. Among them, Dr. Shunei Hirai's study is notable in pointing that not only in the Guanding's additional part of the Zhiyi's commentary but also in the Zhiyi's own dictation part, Guanding's additions from Jizang's 吉藏 (549-623) works, were to be discovered in the existing text. Scrutinizing the

citations from Jizang's works, these citations on Zhiyi's dictation part turned out to be trivial, in terms of his doctrinal thought. Therefore it can be safely said that Zhiyi's commentary is as valuable as it thought to be.

The author decided to make an annotated Japanese-translation of the *Weimojing wenshu*, which has not yet been made in Japan. The author used 『維摩經文疏』 (Sūtra Number 338, vol. 18 of *Shinsan Dainihon Zokuzōkyō* 新纂大日本統藏經 as original. It comprises 90 volumes, including 2 catalogues, which has been published from 1975 to 1980 by Kokusho Kankōkai 国書刊行会, mainly edited by Dr. Kosho Kawamura 河村孝照. And this newly edited Chinese Buddhist canon features great easy-of-use, which is succeeded from *Taishō shinshū daizōkyō* 大正新脩大藏經 in its form. And now one has access to Electric-text version of *Shinsan Dainihon Zokuzōkyō* via web site of CBETA (Taiwan-based Chinese Buddhist Electronic Text Association 中華電子佛典協會.)

This instalment contains merely a few paragraphs, i.e. from X.18.475b10 to X.18.477c23. I intend to continue publication of the annotated translation in the future issues.

*Professor,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies*